

マイクロティーチングの実践に関する一考察

－短期大学保育者養成教育に焦点をあわせて－

加藤 由美¹⁾*

1) 新見公立大学健康科学部健康保育学科

(2019年11月20日受理)

学生の保育実践力と人間関係力の育成に向けて、保育者養成短期大学学生を対象とした1・2年次の授業においてマイクロティーチングの実践を行い、学生47名のアンケート結果から教育的効果について検討した。マイクロティーチングを経験する中で、多くの学生は指導の難しさを実感し、学習状態の認識、学習意欲、指導案の書き方、保育技術、幼児理解に関して概ね効果を認めていたことから、学生の保育実践力の育成に繋がったと推察された。また、学生の人間関係力を育むために、意図的に編成されたグループで実践を行ったところ、様々な意見を出し合いながら協力して活動する経験、話の聞き方や伝え方、意見を言いやすい雰囲気への気付き等が得られ、新たな人間関係の経験に繋がった学生がいたことが窺えた。

(キーワード) 保育者養成教育、マイクロティーチング、保育実践力、人間関係力

はじめに

保育者養成において、保育の実践力を育むことは重要である。多くの保育者養成教育で導入されている模擬保育及びマイクロティーチングの手法は、実践力育成の効果的な教育方法の一つとして捉えられている¹⁾。マイクロティーチングは、授業時間や内容、人数を縮小して教えることで、教育実習生が教育現場で教える前に行える訓練方法であり、金子(2013)は、保育技能を向上させるための実習教育としてマイクロティーチングの実践報告を行っている。保育の実践的能力は、実際の保育場面に直面した時に最も効果的に育成されるものと考えた場合、マイクロティーチングでは、保育構造、教師と幼児のコミュニケーション、幼児の学習過程、教材、教育技術などの保育に重要な構成要素が集約的に含まれている²⁾。幼児教育においては、集団指導を行いながらも、いかに細やかな個別指導を行っていくかが重要となるため、小集団に短時間の保育を行うマイクロティーチングは、綿密に自分の保育を検討するには最適と考えられる³⁾。保育者養成大学学生を対象とした実践では、学習意欲や指導技術の向上、実践ポイントの獲得などに有効であり、自己認識にも影響を与えることが報告されている²⁾。

保育者養成においては、保育現場で求められる人間関係力を育むことも重要である。最近の保育学生について、様々なことを自分の視点から考え、他者の視点に立つことが苦手である、自分を主張したり他者と向き合ったりする経験が乏しく、先輩から何か言われても自分の意見を主張

できない等の傾向が見られるとの指摘がある⁴⁾。保育学生を対象とした調査では、コミュニケーション力は保育者に不可欠な力であると認識していながらも、苦手意識をもつ学生が多いこと⁵⁾、保育者養成校における重要な課題として、意図的に学生同士が関わる機会を設け、人間関係力を向上させること⁶⁾が指摘されている。保育者の早期離職の理由として、職場の人間関係や管理職との関係、職場への適応におけるつまづきが多く見られることから、保育職につく前段階の大学生を対象とした保育者養成教育において人間関係力を育成することにより、就職後の職場適応における困難感が軽減されるのではないかと期待できる⁷⁾。

以上のことから、本研究では、学生の保育実践力と人間関係力の育成に向けた取り組みとして、マイクロティーチングを取り入れた授業実践の教育的効果について検討する。マイクロティーチングでは、各グループに分かれた学生同士が、それぞれ意見を出し合いながら活動を進めていく必要があるため、保育実践力だけでなく人間関係力も育むことができるのではないかと考えた。なお、マイクロティーチングには、実際の子どもを保育する場合と子ども役の大人を保育する場合があります、金子(2013)は後者を簡易型マイクロティーチングと呼んで区別している²⁾。本研究では、学生を子ども役とした簡易型マイクロティーチングを実施したが、便宜上「マイクロティーチング」として報告する。

*連絡先：加藤由美 新見公立大学健康科学部健康保育学科 718-8585 新見市西方1263-2

方法

A保育者養成短期大学学生56名を対象として、2018年度1年次後期「健康」指導法(*1)および2019年度2年次前期「人間関係」指導法(*2)の授業において、マイクロティーチングの実践を行った。以下、*1の授業における実践を「実践1」、*2を「実践2」とする。金子(2013・2018)^{2) 8)}の実践報告を参考に、各授業の後半(第8回～第14回)において、次のような計画により実施した。

(第8回)マイクロティーチングの説明を行う。授業内容に関連した指導案を1人1枚作成する。2年次10月に実施される教育実習での責任実習を想定した内容で、各自、子どもの対象年齢と遊びを決めて作成する。作成にあたっては、実践1・2の各領域のねらいと内容を踏まえた上で、適切な遊びや環境構成、援助を考えるようにする。

(第9回)教員が提示した8グループに分かれ、リーダーと副リーダーを選出する。グループ内で、メンバーの指導案を確認し、その中からグループ別にマイクロティーチング用の指導案を1つ選出する。「指導案作成の留意点チェックリスト」⁸⁾の観点をもとにチェックして、指導案の修正を行う。

(第10回)教材作成、指導手順や技術などの検討のため、グループ内で保育者役と子ども役になって全員が練習を行う。子ども役の学生に対しては、これまでの実習等で子どもと触れ合った経験を思い出し、該当する年齢の子どものイメージしながら言葉を発したり、動いたりできるように意識をもたせておく。

(第11回)1回目指導実践(20～30分)：グループのペアをつくり、グループ同士で互いに保育を実践する。保育者役学生は、実践直前にじゃんけん決定する。保育者役学生は、相手のグループの学生を子ども役にして保育を行う。保育するグループでは、保育者役学生以外は観察者となって、保育者中心、保育者と関わる子ども、その他の子どもというように観察分担を決める。実践後は、修正点を明らかにして、2回目の実践に備えて指導案を修正する。

(第12回)2回目指導実践(20～30分)：グループを変えて、1回目と同様に互いに保育を実践する。

(第13回)保育実践を評価・反省して、修正指導案を作成する。

(第14回)修正箇所を明確にした指導案を全員に配布して報告することで、体験を共有する。

グループ編成を行うにあたっては、事前に、学生の交友関係を把握するためのアンケート調査を実施した。学生生活においては、仲の良い友人同士と一緒に過ごす場合が多いため、様々な学生同士が関わりをもつことができるよう、日頃関わりの少ない学生同士がグループメンバーになるよう可能な限り配慮した。また、実践1・2の前に「学生の

グループ活動や人間関係に関する認識」「学生のグループメンバーに対する印象や思い」「グループ活動において心掛けたいこと」についてのアンケート調査を行った。実施後には、「グループ活動において実践できたこと」についてのアンケート調査、「マイクロティーチング有効性測定尺度」⁸⁾を用いた自己評価を行うと共に、保育実践に関する反省とグループ活動を通しての感想等を記述させた。

「マイクロティーチング有効性測定尺度」では、「①保育技術：発言の取り上げ方」から「②形式に沿った書き方の理解：書式」の20項目において、自分自身にどのような効果があったかを4件法で尋ねた。アンケート調査及び実践1・2の自己評価については、集計結果を図に示した。学生の記述内容についてはKJ法により質的な分析を行い、その結果をカテゴリー別にまとめ、表に示した。

【倫理的配慮】学生(研究対象者)には、口頭にて研究の趣旨、目的、方法を伝えると共に、研究協力は自由意志によるものとし、協力しない場合でも不利益を受けることはないこと、成績評価には一切影響しないこと、授業の成果を研究として公表することについて説明を行い、回答を記述した用紙の提出をもって同意を得たものとした。記述内容の取り扱いに関しては、個人が特定されないように十分配慮した。

結果

学生56名の内、実施前後のアンケート調査及び自己評価・自由記述等が全て提出された47名を分析の対象とした。

「学生のグループ活動や人間関係についての認識」についての集計結果を図1に示した。「あてはまる・少しあてはまる」の回答数が多かった順に挙げると、「人からしてもらったことに感謝の気持ちをもっている」(46)「友達やグループの人が困った時は助けている」(45)「約束を守っている」(45)であった。その他、「人見知りがあり、すぐに人と打ち解けられない」(22)「人間関係に不安や悩みがある」(12)との回答も見られた。()内は回答数、以下同様。

実践1と実践2それぞれの実施前に行った「学生のグループ

表1. 学生のグループメンバーに対する印象や思い(N=47)

質問項目	実践1	実践2
あまり話したことがない人はいるが、うまくやっていた	27	29
日頃から話をしている人が多いので、安心	15	14
あまり話したことがない人が多く、少し不安	2	2
苦手な人がいて不安	2	1
グループの中でうまくやっていく自信がない	1	1

注 数字は回答数

マイクロティーチングの実践に関する一考察

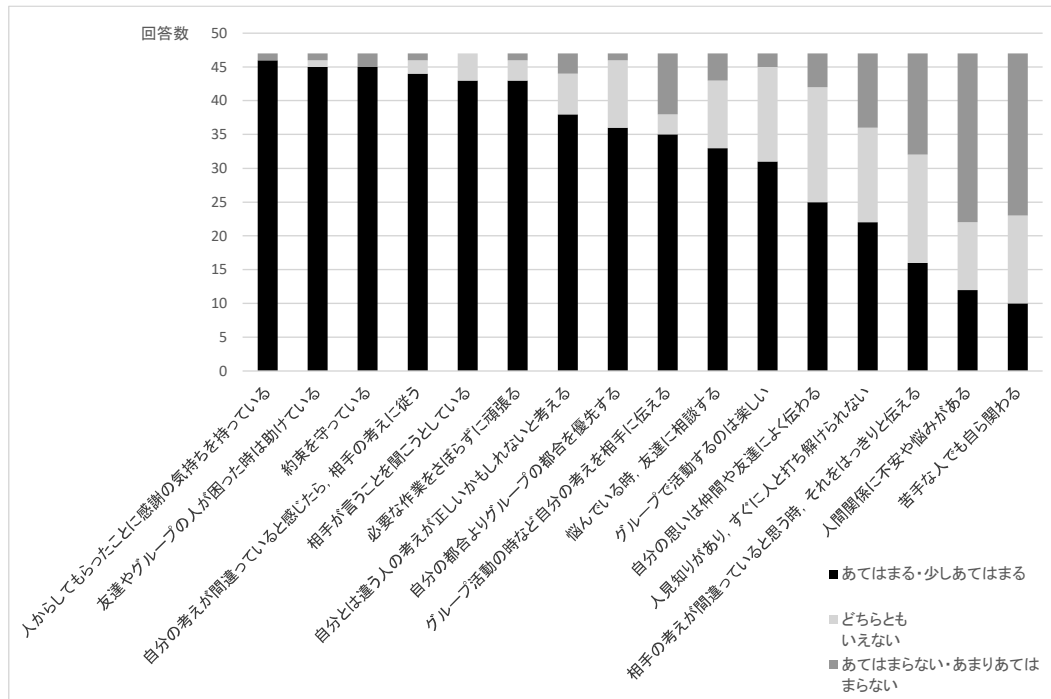


図1. 学生のグループ活動や人間関係についての認識 (N=47)

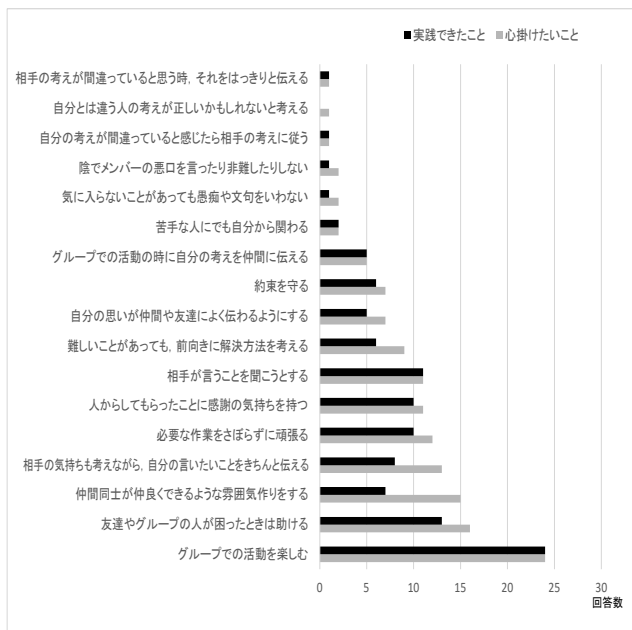


図2-1. 学生がグループ活動<実践1>において「心掛けたこと」と「実践できたこと」 (N=47, 複数回答)

メンバーに対する印象や思い」についての結果を表1に示した。「あまり話したことがない人はいるが、うまくやれている」「日頃から話をしていいる人が多いので安心」との回答が多数を占めたが、「あまり話したことがない人が多く、少し不安」「苦手な人がいて不安」等の回答も少数見られた。

各グループで実施された遊びの内容は、実践1では、運動

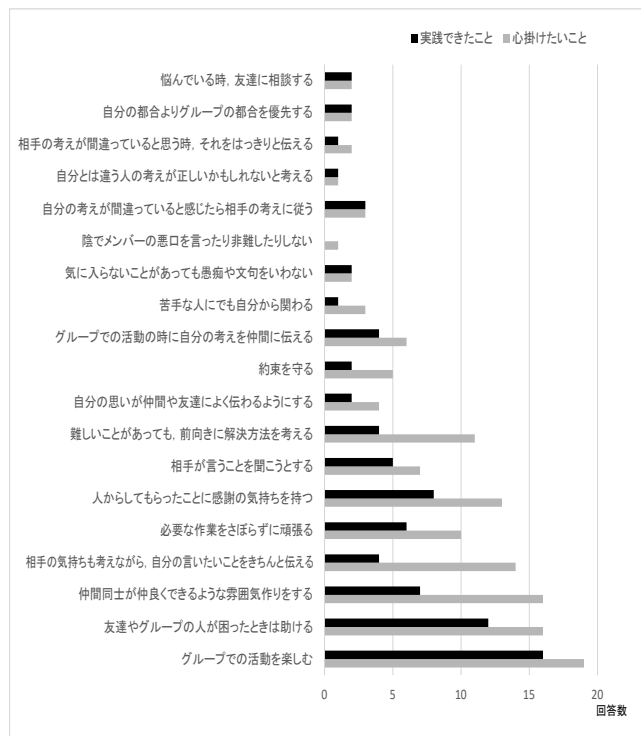


図2-2. 学生がグループ活動<実践2>において「心掛けたこと」と「実践できたこと」 (N=47, 複数回答)

遊び・新聞遊び・鬼ごっこ等、実践2では、じゃんけん遊び・風船バレー・ゲーム等であった。

実践1・2それぞれについて、学生がグループ活動において「心掛けたこと」と「実践できたこと」の結果を、図2-

表 2. 「マイクロティーチング有効性測定尺度」(金子, 2018)

質問項目
保育技術
①保育技術: 発言の取り上げ方 実地指導における子どもの発言の取り上げ方を学んだ
②保育技術: 負の強化 実地指導における禁止・叱責・無視などの活用の仕方を学んだ
③保育技術: 正の強化 実地指導におけるほめ方の活用の仕方が分かった
④指導の流れへの理解: 「活動」間の連携 子ども(集団)が混乱せずに次の活動に移行するような指導を計画する方法を学んだ
⑤保育技術: 注意の集中 実地活動における子ども(集団)の注意の引きつけ方を学んだ
⑥不参加児などへの対処 落ち着かず活動をやらない子どもなどを、無理なく活動に引き込む方法を学んだ
⑦ポイントの置き方: 活動の盛り上がり 子どもの活動が高まるような指導過程を考えて立案することを理解できた
学習状態の認識
⑧学習状態のメタ認知: 保育者の資質 保育者として、自分の良いところ、改めなければならないところが分かった
⑨学習状態のメタ認知: 保育技術 子どもを指導するうえで、自分にはどのような保育技術を身に付けなければならないか分かった
⑩学習状態のメタ認知: 学習知識 子どもを指導するうえで、自分にはどのような学習知識が不足しているか分かった
学習意欲
⑪学習意欲: 自己学習 マイクロティーチングをして、自分から進んで学習しようと思った
⑫学習意欲: 講義(講演)聴講への意欲 マイクロティーチングをして、講義(講演)をしっかり聴こうと思った
⑬自己課題の発見 保育者として、今後の自分自身の学習課題を見出すことができた
指導の難しさ
⑭立案の難しさの実感 一つひとつの子どもの活動についても、その過程を考えながら深く意味を追求して書くといった立案の難しさを理解した
⑮実地指導の難しさの自覚 実際に子ども(集団)を指導することは難しいと実感した
幼児理解
⑯個人差の理解 年齢が同じでも個人差が相当あることを実感した
⑰幼児の発想の豊かさ 子どもの発達の豊かさに気付いた
⑱年齢別活動内容の理解 年齢別の「経験と活動」の内容の違いが分かった
指導案の書き方
⑲形式に沿った書き方の理解: 各欄の関連性 指導案の「環境構成」「子どもの活動」「保育者の援助と配慮」などの各々の欄を関連させて記入する方法が理解できた
⑳形式に沿った書き方の理解: 書式 指導案の「環境構成」「子どもの活動」「保育者の援助と配慮」などの各々の欄を区別して書く方法が理解できた

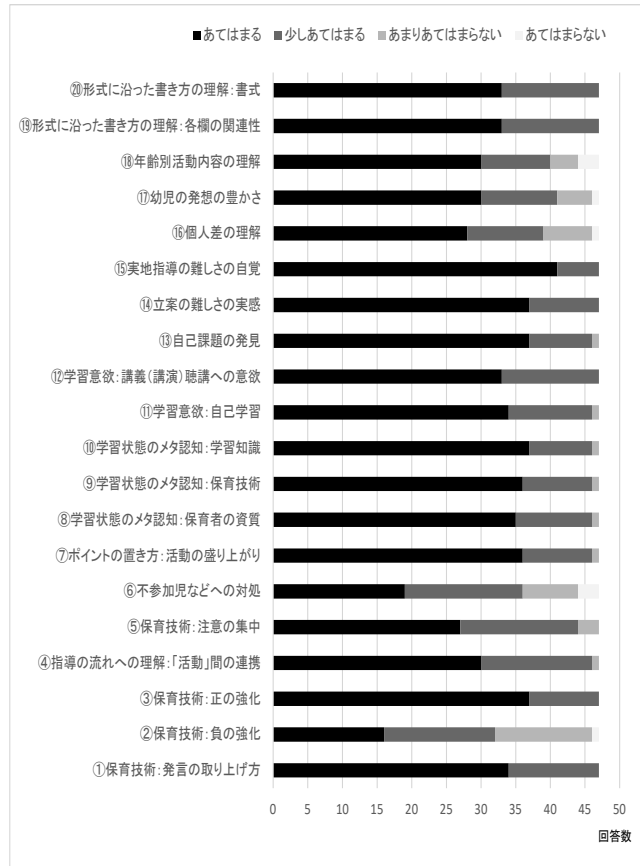


図 3-1. 実践 1 (マイクロティーチング) に対する学生の自己評価 (N=47)

1・2-2に示した。実践1・2共に多かった「実践できたこと」は、「グループでの活動を楽しむ」「友達やグループの人が困ったときは助ける」であった。実践1と比べて実践2では「心掛けたいこと」と「実践できたこと」の間に差が見られた項目が多かった。

「マイクロティーチング有効性測定尺度」の項目を表2に、実践1・2 (マイクロティーチング) に対する学生の自己評価の結果を、図3-1・3-2に示した。実践1・2とも「あてはまる」の回答数が最も多かったのは、「⑮実地指導の難しさの自覚」であり、少なかったのは「②保育技術: 負の強化」であった。また20項目の内、保育技術に関する2項目を除いた18項目において「あてはまる」「ややあてはまる」の合計数が8割を超えていた。実践1・2についての学生による保育実践の振り返りを、表3-1・3-2に示した。実践1に関しては65の記述があり、「気付きや学び」(30)「指導の難しさ」(21)「今後の意欲・課題」(14)に分類された。実践2では68の記述があり、「気付きや学び」(54)「指導の難しさ」(8)「今後の意欲・課題」(5)「その他」(1)に分類された。「気付きや学び」の内容として、実践1・2に共通していたのは、「子どもへの対応」「他の学生の実践から学ぶ」「実践の大切さ」「事前準備」「子ども目線」で

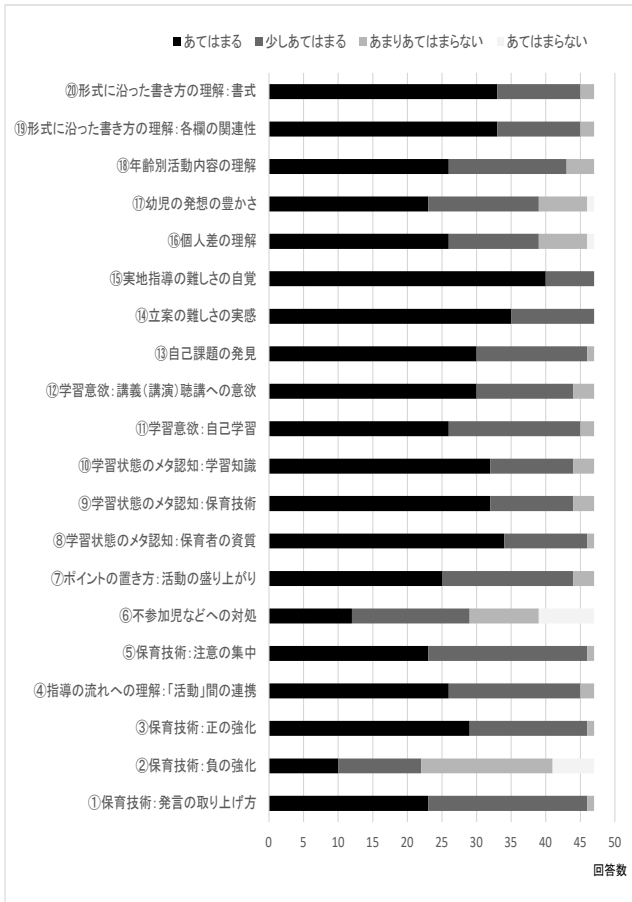


図 3-2. 実践 2 (マイクロティーチング) に対する学生の自己評価 (N=47)

あった。

実践1・2を通して、グループ活動での人間関係に関する内容について22名が45の記述を行っており、それらの記述内容を表4に示した。記述内容は「新たな人間関係を経験」「様々な意見」「協力して楽しく活動」「話の聞き方と伝え方」「意見を言いやすい雰囲気」等に分類された。

考察

保育実践力に関して

今回、学生に実施した「マイクロティーチング有効性測定尺度」(表2)は、「保育技術」「学習状態の認識」「学習意欲」「指導の難しさ」「幼児理解」「指導案の書き方」の6領域20項目で構成されている。実践1・2に関する学生の自己評価は、保育技術に関する2項目を除いた18項目においては、「あてはまる」「ややあてはまる」の合計数が8割を超えていたことから、概ね各領域に関する学生の学びに繋がったと推察された。そして「あてはまる」の回答数が最も多かったのは「実地指導の難しさの自覚」であった。実際に子ども(集団)を指導することは難しいとの実感であ

表 3-1. 学生による保育実践の振り返り<実践 1>

(N=47, 複数回答)

コア カテゴリー	カテゴリー	記述内容
気 付 き や 学 び (3 0)	子どもへの対応 (7)	遊びに集中できない子どもや先生の話を受けない子どもへの対応の仕方が分かった 保育技術や子どもの理解、一緒に楽しむ体力などまだまだ不足しているものがたくさんあることが分かった 子どもを移動させたり、物を渡すタイミングで子ども達の動きが全然ちがってくる。タイミングも遊びを考える上で重要だと思った 子どもに分かりやすい説明の仕方、興味がもてる話し方を学んだ 子ども役の学生の言葉を受容することしかできなかったし、難しい子どもへの関わり方が特に課題だと思った 最初に子どもの興味をひくことの大切さを学んだ 臨機応変に対応することの大切さを学んだ
	他の学生の実践から学ぶ (7)	他の人の指導を見て、子どもへの声かけやひきつけ方、対応の仕方を学んだ(3) 他の人の指導を客観的に見ることができ、普段気付かないことに気付いていい勉強になった(2) 一人一人まったく違う発言、発想をしていた 保育の流れや声かけをどうしたらいいかが理解できた。遊びの内容や導入も参考になった
	実践の大切さ (6)	自分の言葉かけや間のとり方を学ぶことができた 頭の中の想像と実際にやるのでは全然違う。実践の大切さを学んだ 学生同士でティーチングを行うことによって難しい所、子どもに伝えにくいところが分かってよかった 自分が思ったよりも子どもに説明することが難しかったり、実際の活動が難しかったりすることが分かった 自分が指導したあとに、客観的な意見を友達から言ってもらえて、先生役をしたくないと思っていただけ、して良かった 他
	事前準備 (4)	自分がしっかりと遊びを理解していない子どもに指導できない(2) 自分たちで一度やっておくべき(場所の範囲、分かりやすいルール)の伝え方(2)
	指導案にとらわれすぎない (4)	実際の子どものもついろいろな反応をかえてくれると思うので、そこまで想定してできるようにねばらない(2) 指導案に沿った援助をすることで精一杯で、子どもの発言や行動に 대응することができなかった。指導案に頼りすぎないように、もっと柔軟な対応ができないといけない(2)
	子ども目線 (2)	実際に子どもになりきって遊びの指導を受ける中で、子どもが保育者のどこに注目しているのか学ぶことができた 子どもになることで子どもの気持ちに気付けた
	指導の難しさ (21)	思うように指導が進まず、指導することの難しさを感じた(5) 予想しなかった行動への対応方法が難しかった(2) どうすれば子どもが保育者の方を見るのか、集中するのか(2) 子ども達に遊び(ルール)の説明をする時、どのようにすれば一番伝わるのかをすごく考えさせられた(2) 色々な子どもを想定した時の対応に困った(2) 子どもに合った遊びを考えて指導案を作り、実践することの難しさ(2) 指導案を立案し、実行する難しさを知った。子どもが実際にいる状態だと、さらに一人一人の子どもを見て配慮すべき点が出てくると思う(2) 子ども達の性格や特性はそれぞれ違うので、それに合わせつつ全体を進めていくのは難しいと感じた 指導案を書いた時には良いと思っていても、実際にやってみると難しさを感じた。何度も修正を加えると良くなると思った 指導案を書く時にクラスの特徴を理解して作成しなければ活動がスムーズに進まない 子どもが興味をもてるような導入の仕方や子どもの発達をふまえた遊びを考えることの難しさ分かった
	今後の意欲・課題 (14)	遊びの流れや子ども達の行動をもっと想定した指導案を書きたい(3) 何度も行ううちに改善点が見えてきたので、今後に活かしたい 話し方のクセを直して、子どもの注目を集められるようにしたい 子どもに分かりやすい説明の仕方を考え、実行したい 声の大きさや顔の表情などを大切にしながら、子どもと一緒に自分も楽しめるような指導が今後できるようになりたい どうすれば子どもが楽しんでくれるか、どのように子どもに対応する必要があるのかを考えながら保育していきたい 子ども達が遊びに入りやすいような導入を考えていきたい 色々な事態への予測や子どもの興味のひきつけ方など勉強したい 個々に応じた声かけをもっと経験して身に付けたい 次回の実習で使えるような遊びが沢山あって良かった。その時までには指導の仕方をしっかり学びたい 指導案の書き方、ねらいと内容の書き方が分かった。その指導案にそった保育者の発言などを学ぶことができた。これから年齢にあった指導案を書くことができるよう考えていきたい どこでどんな援助をすればいいのかを考えて指導案を作りたい

注()内は回答数

表3-2. 学生による保育実践の振り返り<実践2>
(N=47, 複数回答)

コア カテゴリー	カテゴリー	記述内容
気 付 き や 学 び (5・4)	他の学生の実践からの学び(13)	指導方法や子ども役の反応は人それぞれであると改めて学んだ(3) 他のグループの人の指導の方法や声かけが参考になった(2) 他の人やグループの遊びを見て、学ぶことが多くあった(2) 他の人の指導を見て、良いと思うものがあったので取り入れた(2) 人の実践を見ていなければ気がつくこともあったので、それに気付くことができたのは良かった(2) グループで話し合うことで自分で気付かなかったことに気付いた 他のグループの遊びを知って新たな発見をした。声かけにしても、子どものしたいことに寄り添ったり褒めたりしていたので参考になった
	子どもに分かりやすい言葉かけ(12)	子どもへの声かけが大切。指導する際には、分かりやすくはっきり丁寧に伝えていくことで、理解しやすくスムーズに活動できる(5) 遊びのルールを説明するのが難しい。子どもが分かりやすい言葉を選ぶ必要がある(3) 活動への興味をひきつける導入の仕方や話し方について学んだ(2) 説明を丁寧にわかりやすくしないと、理解するのが難しい。ルールを幼児と一緒に全員で確認するなどしたら分かりやすいと思った 遊びをどのように行うかを保育者がやって見せたり、図に示したりと、視覚的なルールの提示が大切だと分かった
	保育者のあり方(8)	子どもの興味、関心を引き出すために保育者の表現力が大切(2) 子どもを楽しませるには、自分がしっかり活動を把握しておくこと、自分自身が楽しむことが大切だと思った バツとひらめくような発想が保育者には必要 人間関係を育めるように友達同士の関わり方を促すのも保育者の役割だと実感した 指導案をなぞるのではなく方向性を捉えた上で柔軟に行うことが大切 何をねらいにするかで配慮が大きく変わること改めて学んだ 保育者が提案するだけでなく、子どもに意見を求め、それを取り入れることで子どもがより積極的に遊びに参加できることを感じた
	実践の大切さ(4)	どんなに話し合っても計画を練っても実践しないと分からないと知った 指導案を実際に行ってみることで、流れや難しさが分かると思った 実際にやってみて変更すべき点など具体的に考えることができた 1回目の反省を踏まえて2回目の方がスムーズに活動が行っていたので何度もシミュレーションをすることが大切だと思った
	子どもの目線(4)	子どもの立場になったことで、保育者の表情や声のトーンなど客観的に見ることができ、たくさんの学びがあった(2) 子ども目線に立つて指導し、指導案を何度も修正することが大切 子どもがどのような動きをするのか、それに対してどう援助・配慮する必要があるかを予想できた
	実際の保育との違い(4)	自分達は大学生だから今までの経験からルールが分かるが、子ども達は初めてのことが多いので、より分かりやすく楽しめる声かけが大切(2) 子どもに指導する場合には指導案通りでない部分がある。実際の子どもを想像するために、発達の状態を知っておくことが大切 不参加児や個別指導の必要な子どもがおらず、それが現場と違うところだと思うので、経験できると良かった
	子どもへの対応(3)	子どもの反応や様子に応じて声掛けする難しさや大切さに気付いた 子ども役の学生から次々と意見が出たが、実際に子どもから意見が出てきたら、それをどう取り上げるのが難しいのかなと思った 人数に応じたルールにすることや範囲を変えること等、臨機応変な対応について学ぶことができた
	必要な配慮(3)	集団と個のバランスを意識して活動を進めなければならないと思った 安全面の配慮の大切さがわかった 子どもが楽しむために工夫や配慮について学んだ
	事前準備(3)	指導案をしっかり立てて子どもの動きを考えていくことが大切 子どもに分かりやすい言葉で遊びのルールを伝えることができず何度も言い直したりしたので、事前に練習すべきだった 実際に子どもの姿をシミュレーションすることはとても大切だと思った
	指導の難しさ(8)	子どもに分かりやすく説明することは難しいと感じた(2) 自然に幼児が活動に参加できるような声かけの難しさを感じた 自分が指導者だったらとイメージで考えると、指導の難しさを感じた 空間の使い方や説明の仕方が難しいと感じた 臨機応変に対応する難しさを感じた 他
	今後の意欲・課題(5)	計画してもその通りいかないのが保育、臨機応変に対応したい(2) 次の実習にいかに素材がたくさんあるので、積極的に取り組みたい 他人の指導案で指導することの難しさを感じた。誰が見ても分かるような指導案を書けるようにしたい 子どもの言葉を受容し、反応することで気持ちを知ったり共感できたりするので大切にしていきたい 他
	その他(1)	指導案の書き方などは分らない部分が多かったが、今回はたくさんの経験を積んでいたのて前よりも自分なりに工夫して書くことができた

注()内は回答数

表4. 学生のグループ活動での人間関係についての振り返り
<実践1・2> (N=22, 複数回答)

カテゴリー	記述内容
新たな人間関係を体験(11)	遊びを通して、普段の生活の生活で話す機会が少ない人とも話そうことができ、その人のおもしろい所、優しい所に気付くことができた。たくさんの人とコミュニケーションをとり自分の人見知り克服したり、その人の良い所を吸収したりしていきたい(学生B) いつも一緒にないメンバーで楽しんだり話したりすることは楽しかった。どこに行っても誰でもすぐに話ができる力を身に付けたい(学生C) いつもいる友達以外の人がメンバーだったので新鮮な気持ちになった。いいところも見つけたのでいい体験だった(学生D) いつも一緒にいる友達ではなく、時々話をする程度の人もいたので、楽しく活動できるか、その中でちゃんと自分の意見を言えるかが課題だと思っていた。しかし、実際一緒に活動してみると、みんな私の話を聞いてくれ、意見を言ってくれたりして、自分の意見を言いやすく、話し合いも盛り上がりがあった。今まであまり話したことのない友達とも話したり、楽しく活動したりすることができた(学生E) 今まで話したことがない人たちだったけど、この活動を通してその人の性格が知れてよかった(学生F) 普段あまり組むことのないグループでとても新鮮な活動だった(学生G) 普段あまりかわりない友達とも楽しい時間を過ごすことができ嬉しかった(2) 静かでおとなしいと思っていた子ども、意外と一緒に盛り上がり楽しく活動できた。一緒に遊ぶことで距離が縮まった。 あまり話したことがない友達とも会話でき、よい機会になった。同じ保育者という目標を持った人たちとこれからは日々課題を見つながら努力していきたい チームの友達の中には今までほとんど話したことのない人もいたが、この活動を通してたくさん話して仲良くなることができた 一人一人違った考えや意見があって参考になった(3)
様々な意見(8)	数人で考えることにより新たなアイデアや工夫が生まれた(2) グループで活動することで様々な意見が出て、よいところや改善点を見つけていくことができた グループで意見を言い合うことで自分では思いつかなかったことやアドバイスなどがたくさん出てきて刺激になった どこを改善したらいいか意見も出し合えたのでスムーズに進んだ みんなで協力してとても楽しいグループ活動ができた(2) グループのメンバーとなごやかな雰囲気の中で楽しく活動できた(2) みんなどうしたら良くなるか考えたアイデアを言ったり一緒に楽しみながらできたのでよかった みんなで協力してグループ活動を行うことができた
協力して楽しく活動(6)	グループ活動では相手の話をよくきくこと、自分の思いを分かりやすく伝えることが大切だと思った 相手の意見を聞いたり、自分の意見を分かりやすく伝えたりすることが大切だと思った グループ活動なのでやっぱりチームワークが大切で、みんなの意見を聞きつつ自分の意見もしっかり伝えられるよう、これからはもっともっと頑張っていきたい グループでの話し合いで、違う意見のときは全て否定するのではなく「～はそう思うけど、～は～だと思う」などと肯定も交えながら伝えたりすることが大事だと感じた
話の聞き方と伝え方(5)	私は自分の意見の主張が強いため、相手の意見を聞きながらも自分の意見を言うことを心がけた。自分から意見を言えない人には、自分から尋ねたりして全員の意見を一度は聞くように努めた 意見が出やすいような雰囲気作りをすることが必要(2) 人の話を最後までささげずに聞くことで意見が出やすくなる人が話している時、うなずいたり反応したりすると話しやすい グループで協力することや雰囲気づくりも大切だと分かった 相手が意見を言いやすいよう、うなずいたり適度に質問を挟んだりして参加した
積極的に活動(4)	グループ全員で解決方法を解決方法を考え、助け合うことができた 全員が積極的に活動できていた 積極的に行動することでグループが活発になる 積極的に自分からかかわることで仲間の輪が広がるので、これからも自ら進んで行動していきたい
受容(3)	他の人の意見の方がふさわしい、正しいと思ったときに、相手の意見に従うことができた 他の人の意見を受け入れることも大切 グループで決まったことに素直に従う
自己主張(2)	みんなで話し合い、自分の意見を言うことができた。現場に出た時も人間関係や先生同士の連携が大切になってくるので、その力を伸ばしていきたい 話し合いを繰り返していくうちに、自然と自分の思っていることを口に出すことができてきたように思う
その他(1)	グループのメンバーが親しい人達だったので、気に入らないことがあっても愚痴や文句を言わないことを課題とし、活動が円滑に進むように努めた。親しい人達だからこそ意見が言いにくい場面もあったので、そこはその人のためと思って言うようにしたい

注()内は回答数

り、特に実践1では「思うように指導が進まず、指導することの難しさを感じた」「予想しなかった行動への対応方法が難しかった」「どうすれば子どもが保育者の方を見るのか、集中するのか」(表3-1)等の記述内容からその難しさが窺えた。次に多かったのは「立案の難しさの実感」であった。1つひとつの子どもの活動について、その過程を考えながら深く意味を追求して書くといった立案の難しさの理解であり、「子どもに合った遊びを考えて指導案を作り、実践することの難しさ」「指導案を書く時にクラスの特徴を理解して作成しなければ活動がスムーズに進まない」(表3-1)等の記述があった。金子(2013)は、保育者養成大学の学生に簡易型マイクロティーチングを実施した結果、「実践の難しさ」の平均値が最も高かったこと、そして実践が難しいと認識した者ほど、学習意欲を高め、実践のポイントをつかみ、指導技術を獲得していたと報告している³⁾。指導案の立案とそれに基づく実地指導は保育実践力と直結しており、保育・教育実習では必須であるため、学生にとっては避けて通れない課題である。まずは実践を通して、その難しさを実感することが第一歩であり、それが様々な気づきや学び、自己の課題を見出すことに繋がっていくと考えられる。

次に多かったのは「学習状態のメタ認知」で、保育者の資質や学習知識、保育技術に関する内容である。「子どもの興味、関心を引き出すために保育者の表現力が大切」「パッとひらめくような発想が保育者には必要」といった記述の他に、特に実践2で見られたのは、「子どもに分かりやすい言葉かけ」の大切さである。「子どもへの声かけが大切。指導する際には、分かりやすくはっきり丁寧に伝えていくことで、理解しやすくスムーズに活動できる」「遊びのルールを説明するのが難しい。子どもが分かりやすい言葉を選ぶ必要がある」(表3-2)等の記述があった。そのため、実習やボランティア等において実際に子どもと言葉のやりとりを経験したり、授業で様々な発達段階の子どもとのコミュニケーションの方法について具体的に学んだりすることが不可欠であると考えられる。

その一方で、「保育技術：負の強化」や「不参加児などへの対処」については評価が低かった。その理由として、学生達は保育において、子どもの言動をできるだけ肯定的に受け止め、受容的に関わるといった意識が基盤にあることや個別に支援を要する子どもを想定しづらかったことが考えられる。「不参加児や個別指導の必要な子どもがおらず、それが現場と違うところだと思うので、経験できると良かった」(表3-2)との記述もあり、実施前に学生達がそうした子どもの姿を十分にイメージできるような場面を設け、個々の子どもの特性に応じた効果的な対応方法について考えられるようにする必要がある。

その他、学生の振り返り内容には「他の人の指導を客観的に見ることができ、普段気付かないことに気付いている

勉強になった」(表3-1)といった他学生の実践からの学びに関する記述や、「子どもの立場になったことで、保育者の表情や声のトーンなど客観的に見ることができ、たくさん学びがあった」(表3-2)といった子ども目線での気づきに関する記述等が見られた。学生が模擬保育を体験することは、子どもの心情理解を可能にする効果や、保育を客観的に省察する効果があることが報告されている⁴⁾。マイクロティーチングでは、保育者役の学生以外にも、子ども役、観察者といった役割が割り当てられる。保育者役の学生が自ら保育を実践する中で、多くの気づきや学びが得られるのはもちろんであるが、それ以外の学生も、それぞれの視点から客観的に保育者の言動を観察したり、実際に子ども目線になったりする中で、異なる観点からの気づきや学びが得られると推察された。

人間関係に関して

学生のグループ活動や人間関係についての認識として、「人からしてもらったことに感謝の気持ちをもっている」「友達やグループの人が困った時は助けている」「約束を守っている」「自分の考えが間違っていると感じたら、相手の考えに従う」「相手が言うことを聞こうとしている」「必要な作業をさぼらずに頑張る」(図1)等の回答が多く見られたことから、学生達はグループ活動等において、相手の立場や考えを尊重しながら協力的に活動しようとする意識を持っていたと考えられた。実践1・2においては、日頃関わりの少ない学生同士も交流できるよう意図的にグループ編成を行ったが、学生のグループメンバーに対する印象や思いとしては、「あまり話したことがない人はいるが、うまくやっていける」「日頃から話をしている人が多いので安心」(表1)との回答が多く、グループの人間関係やメンバーに対して肯定的な印象を抱いた学生が多かった。

実践1・2共に、学生がグループ活動において実践できたこととして多く挙げたのは「グループでの活動を楽しむ」「友達やグループの人が困ったときは助ける」(図2-1・2-2)であった。保育においては、まず保育者自身が活動を楽しむことが大切であり、学生達がそのような姿勢で活動に取り組んでいたこと、またグループ活動において大切な仲間同士での助け合いができていたことが窺えた。学生が実践前に「心掛けたいこと」として挙げた内容と実施後に「実践できたこと」として挙げた内容では、特に実践2において差が見られた。具体的には「相手の気持ちも考えながら、自分の言いたいことをきちんと伝える」「仲間同士が仲良くできるような雰囲気作りをする」「難しいことがあっても、前向きに解決方法を考える」(図2-2)等であり、これらは心掛けたい内容ではあっても実際に行うことは容易ではないと推察された。例えば「相手の気持ちも考えながら、自分の言いたいことをきちんと伝える」ことは、自分も相手

も大切にしたい自己表現、適切な自己主張であると考えられるが、実際の場面では、自分の思いを一方向的に伝えてしまう、あるいは自分の思いを抑えて相手に合わせてしまうといったことも起り得る。「親しい人達だからこそ意見が言いにくい場面もあったので、そこはその人のためと思って言えるようにしたい」（表4）との学生の記述も見られた。学生同士が良好な人間関係を保ちながら活動するために、様々な場面で意識的に行動できるよう意欲を高める必要がある。

実践1・2のグループ活動においては、新たな人間関係を体験したとの記述が多く見られた。学生の中には「人見知りがあり、すぐに人と打ち解けられない」「人間関係に不安や悩みがある」（図1）と回答した者や、グループメンバーに対して「あまり話したことがない人が多く、少し不安」「苦手な人がいて不安」「グループの中でうまくやっていく自信がない」（表1）と回答した者がいた。「人見知りがあり、すぐに人と打ち解けられない」に「ややあてはまる」と回答した学生B・C・D・Eは以下のように記述していた。「遊びを通して、普段の生活で話す機会が少ない人とも話すことができ、その人のおもしろい所、優しい所に気付くことができた。たくさんの人とコミュニケーションをとり自分の人見知りを克服したり、その人の良い所を吸収したりしていきたい」「話し合いを繰り返していくうちに、自然と自分の思っていることを口に出すことができてきたように思う」（学生B）「いつも一緒ではないメンバーで楽しんだり話をしたりすることは楽しかった。いつどこに行っても誰でもすぐに話ができる力を身に付けていこうと思う」（学生C）「いつもいる友達以外の方がメンバーだったので新鮮な気持ちになった。いいところも見つけたのでいい体験だった」（学生D）「いつも一緒にいる友達ではなく、時々話をする程度の人もいたので、楽しく活動できるか、その中でちゃんと自分の意見を言えるかが課題だと思っていた。しかし、実際一緒に活動してみると、みんな私の話を聞いてくれ、意見を言ってくれたりして、自分の意見を言いやすく、話し合いも盛り上がった。今まであまり話したことの無い友達とも話したり、楽しく活動したりすることができた」（学生E）。「グループの中でうまくやっていく自信がない」と回答した学生Fは「今まで話したことがない人たちだったけど、この活動を通してその人の性格が知れてよかった」と記述していた。また「苦手な人がいて不安」と回答した学生Gは「普段あまり組むことの無いグループだったのでとても新鮮な活動だった」（いずれも表4）と記述していた。以上のことから、学生の人間関係力を育むために、意図的に様々な学生同士が関われるような場を設け、積極的に意見を伝え合ったり、相手の良さに気付いたりする経験を重ねていくことが大切であると考えられる。

おわりに

マイクロティーチングの実践を通して、多くの学生は指導の難しさを実感し、学習状態の認識、学習意欲、指導案の書き方、保育技術、幼児理解に関して概ね効果を認めていた。また、意図的に編成されたグループでの実践を通して、様々な意見を出し合いながら協力して活動する経験、話の聞き方や伝え方、意見を言いやすい雰囲気への気付き等が得られ、新たな人間関係の経験に繋がった学生がいたことが窺えた。以上のことから、マイクロティーチングの実践が、学生の保育実践力や人間関係力を育むことに繋がる可能性が示唆された。保育者養成教育においては、現場で求められる力を育むために多様な形で実践が行われている。そのため、今後も様々な取り組みを参考としながら、学生の保育実践力や人間関係力の育成を図っていきたい。

文献

- 1) 上村昌 (2013) 保育者養成段階における保育実践力の向上に関する一考察 (2) 高田短期大学紀要31, 79-88.
- 2) 金子智栄子 (2013) 保育者の力量形成に関する実践的研究—有効な保育者養成と現職研修のあり方を求めて— 風間書房.
- 3) 金子智栄子 (2007) マイクロティーチングに関するわが国の研究動向について—保育者養成 課程へのマイクロティーチングの導入と課題—文京学院大学人間学部研究紀要9 (1), 131-150.
- 4) 今井和子 (2016) 主任保育士・副園長・リーダーに求められる役割と実践的スキル ミネルヴァ書房.
- 5) 小川房子 (2011) 笑顔あふれる保育者を育てるということ (諏訪きぬ監修・戸田有一・中坪史典・高橋真由美・上月智晴編著 保育における感情労働—保育者の専門性を考える視点として—, 155-156) 北大路書房.
- 6) 永渕美香子 (2016) 保育者養成校における人間関係力の育成. 保育文化研究 (2), 39-50.
- 7) 加藤由美・安藤美華代 (2018) 大学生の人間関係力育成に関する研究の動向と保育者養成教育への活用に向けて. 岡山大学教師教育開発センター紀要9, 337-350.
- 8) 金子智栄子・金子巧一・金子智明 (2018) 保育者の力量を磨く—コンピテンス養成とストレス対処— ナカニシヤ出版.

付記

本研究成果の一部は、科研費 (18K03163) の助成を受けている。